SINCE 1971
JSWH
The Japanese Society for Wound Healing
NEWS LETTER
日本創傷治癒学会
2012.6
No.69

第42回日本創傷治癒学会開催予定と 2012 SAWC/WHS学術集会参加記

札幌医科大学皮膚科 小野 一郎

私どもは日本創傷治癒学会理事会ならびに評議員会、総会のご推薦とご承認を頂き、第42回日本創傷治癒学会を主宰させて頂く運びになりました。大変に長い歴史と実績を持ちます本学会を札幌で開催させて頂けるのは大変に光栄に存じております。会場は札幌市中央区のかでる2・7（道民活動センタービル）（〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目TEL 011-204-5100）で2012年12月2日の午後から4日迄の3日間にわたり、学術集会・総会・プレシンポジウム等を開催させて頂くこととし、現在鋭意準備を進めております（図1）。このことを踏まえまして本ニューズレターの前半では第42回日本創傷治癒学会の開催予定をご報告させて頂きますとともに後半ではその会期中に開催予定の第2回WHS-JSWH合同シンポジウムの司会者やWHS側の演者との打ち合わせを主目的として訪問した2012 SAWC/WHS meetingの参加記をご報告させて頂きます。

日本創傷治癒学会は昭和46年に第1回の研究会が開催され、北海道では昭和61年に第16回の研究会を北海道大学の第二外科学講座の田辺達三先生が開催されて以来の開催となります。ご存じのように本学会は外科学、形成外科学、皮膚科学、病理学をはじめとした基礎研究者さらには看護学研究者が横断的に集って、基礎的研究成果を発表するとともにその現実的・集学的な臨床応用の手法の確立を目指して議論を行ってきたことが特徴的な学会です。特に最近は基礎医学の分野から再生医療に関わる最新の研究成果が多数報告されるようになる傍ら、臨床家や看護研究者から臨床に直結する治療戦略に関わる重要な報告が多数報告され、各分野の研究者間で大変に貴重な議論が行われる様になっており、本学会が創傷治療の現場に果たしている役割は従来にも増して大きくなってきております。このような背景から本学術集会のテーマも「From bench to home through bed side for the patients suffering from wounds: 創傷を抱えた患者のために研究成果をベッドサイドを越えて家庭まで」とさせて頂きました。

本学術集会のプログラム委員会の委員長には日本静脈経腸栄養学会理事長、札幌医科大学外科学第一講座教授 平田 公一先生にご就任頂き、プログラム委員には赤坂 喜清先生（東邦大学医学部 病理学講座）、市岡 滋先生（埼玉医科大学 形成外科学）、上田 実先生（名古屋大学大学院頭頸部・感覚器外科学、日本再生医療学会理事）、真田 弘美先生（東京大学大

●日本創傷治癒学会事務局
〒160-8582
東京都新宿区信濃町35
慶應義塾大学医学部外科学教室内
tel.03-3351-4774
fax.03-3355-4707
e-mail: info@jswh.com
URL : http://www.jswh.com

【会　期】2012年12月2日(日)～4日(火)

【会　場】かでる2・7 〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目 TEL 011-204-5100

【会　長】小野　一郎（札幌医科大学医学部皮膚科）

演題登録期間　2012年7月18日(水)～8月21日(火)

http://www.ec-pro.co.jp/42jswh/

■招待講演Ⅰ　Transplantation – past, today, future –
Elof Eriksson, M.D., Ph.D.
Professor of Plastic and Reconstructive Surgery,
Brigham and Women's Hospital, USA

■招待講演Ⅱ「標的治療の創傷治療への応用」
濱田 洋文　先生
（東京薬科大学生命科学部腫瘍医科学研究室 教授）

問い合せ先　運営事務局　株式会社イベント･コンベンション･プロ
札幌市北区北7条西4丁目8-3 北口ヨシヤビル7F　担当:久松
TEL 011-299-5910　FAX 011-299-5911　42jswh@ec-pro.co.jp

事　務　局　第42回日本創傷治癒学会　札幌医科大学医学部皮膚科学講座
札幌市中央区南1条西16丁目
TEL 011-611-2111(3455)　FAX 011-613-3739　ichiro@sapmed.ac.jp

プログラム委員長

平田 公一（札幌医科大学外科学第一講座教授、日本静脈経腸栄養学会 理事長）

プログラム委員（五十音順）

赤坂 喜清（東邦大学医学部 病理学講座教授）
市岡　滋（埼玉医科大学 形成外科学教授）
上田　実（名古屋大学大学院頭頸部･感覚器外科学教授、日本再生医療学会理事）
真田 弘美（東京大学大学院医学系研究科健康医学･看護学専攻老年看護学/創傷看護学分野教授、日本創傷･オストミー･失禁管理学会理事長）
鈴木 茂彦（京都大学大学院医学研究科形成外科学教授）
徳永　昭（日本医科大学武蔵小杉病院消化器病センター名誉教授）

【図1】

学院医学系研究科健康医学・看護学専攻老年看護学/創傷看護学分野日本創傷・オストミー・失禁管理学会理事長)、鈴木茂彦先生(京都大学医学部附属病院形成外科)、徳永昭先生(日本医科大学武蔵小杉病院消化器病センター)(五十音順)にご就任頂き、それらの学会との共催でシンポジウムならびにプレコングレスシンポジウムを企画して頂く予定でおります。

12月2日のプレコングレスシンポジウムでは最近注目を集めている陰圧吸引治療のテーマで教育的講演会を開催する予定でおります。学会の初日、日曜日の午後からの開催ではありますが、12月の北海道は天候により、飛行機の運航にも支障が出る可能性をご考慮頂き、土曜日の夕方あるいは日曜日の朝にご来道いただき、ちょうどこの時期に毎年開催されておりますホワイトイルミネーション・ミュンヘンクリスマス市などの催し物を楽しんでいただきますと有り難いです。また、北国の海産物をはじめとした北海道のおいしいお食事を楽しんでいただければとも思っております。このようなせっかくの機会ですので私どもも12月2日の夕方にはウエルカムパーティー、3日には会員懇親会、さらに4日の朝にはInnovation seminar(軽食付)の開催を計画し、学術的な面だけでなく、北国の食材を使用しましたお食事で食欲も満足して頂ける様な機会にさせて頂く所存でおります。

引き続き12月3日午前中には第一会場で日米合同(WHS-JSWH)合同シンポジウム、引き続き午後には招待講演Iとして米国からBrigham and Women's HospitalのElof Eriksson教授の「Transplantation - Past, today, future -」とのタイトルでのご講演を予定しており、翌4日には東京薬科大学腫瘍医科学研究室教授濱田洋文先生の招待講演II「標的治療の創傷治療への応用」とのタイトルでのご講演も予定しております。さらにそれらに加え、外科治療における創傷治療・再生医療、さらに再生医療の現状と将来と題した2つのシンポジウムの開催も予定しております。一方、本会は創傷治療の臨床の第一線でご活躍していらっしゃる看護師の皆様にも数多くご出席頂くために日本創傷・オストミー・失禁管理学会理事長の真田弘美教授にもプログラム委員にご就任頂き、各種の企画、ご発表の機会を用意させて頂く予定でおりますので看護の分野からの多数の皆様のご参加も心からお願い申し上げます。

演題受付期間は2012年7月14日から8月21日を予定致しておりますので、ふるってご参加下さい。尚、上記の特別プログラムに加え、主題演題として、糖尿病性潰瘍の治療戦略、陰圧吸引治療の実際、多血小板治療の潰瘍治療における意義、閉創と感染、創傷治療のチーム医療(看護の立場から)も公募させて頂き、主題演題として採用させて頂きましたら長めのご講演をして頂く予定でおります。

さて、後半の2012 SAWC/WHS meetingの参加記でございますが、この度の学術集会は2012年4月19-22日まで米国Georgia州のAtlantaのGeorgia World Congress Centerで開催されました(図2、3)。Atlantaは皆様もご存じの様にGeorgia州の州都でAtlanta市自体の人口は42万人あまりです。しかし、皆様にもおなじみのCNN放送局やコカコーラの本社、さらにはデルタ航空の本社とハブ空港としての

【図2】2012 SAWC/WHS meetingが2012年4月19-22日まで開催された米国Georgia州のAtlantaのGeorgia World Congress Center前の筆者。

ハーツフィールド・ジャクソン・アトランタ国際空港（大変に巨大で絶え間なく飛行機が発着する空港でした。）があることでも商業・経済・報道の中心地的な役割を果たしている町ですので周辺の28郡にまたがる都市圏では526万人を越えるそうです。学会場もそのCNN本社ビル（図4）の直ぐ近傍に有り、Atlantaの市街地の中心という大変に良い環境での開催でした。なお、1996年に開催されたAtlantaオリンピックの記念公園も隣接しております。

本来WHSは日本創傷治癒学会と同様、大変にアカデミズムの高い学会ですが会員数も限られており、数年前までは単独で開催していましたので大変に小さな会場で常に熱い議論が繰り広げられる参加して大変に刺激を多く受けることができる学会でした。反面、SAWC（The Symposium on Advanced Wound Care）は日本の褥瘡学会にも似た大変に大規模な集会で年に2回開催され、医師に加え数多くの看護師の皆様が参加される学会です。数年前から、おそらくお互いの研究成果の共有と、臨床からのfeedbackが得られやすいという点、さらに開催費の点からWHSはSAWCとの共同開催をする様になりました。私がSAWC/WHSの合同学会に参加しましたのは2009年の4月26-29日に米国Texas州DallasのGaylord Texan Hotel and Convention Centerで開催されたのが初めてでした。それまでもWHSの学術集会には何度か参加させて頂いてはいましたがその開催規模が感覚的ではありますが10倍以上

【図3】米国Georgia州Atlantaの市街地を望む。

【図4】CNN本社ビルの内部。

【図5】会場内入口の様子。

になったように感じたのが大変に印象的でした。とはいえ、WHSは独自のプログラムをWHS programとして独自に提供しており、その内容は以前のWHSの学会と同じなのですが、参加人数の増加と展示会場での企業展示が国際会議並みになっていたことに大変に驚いた記憶が鮮烈でした。

この度の学会でもそのときの印象と同様でしたが、その2009年の会期中に初めての試みとしてWHS International Session: Japanese Society of Wound Healing (JSWH) and Wound Healing Society (WHS) joint Sessionが開催されました。開催に当たりましてはWHSのDr. Laura Parnelと本学会からは秋田定伯先生がmoderatorとして参加し、私を含めた3人の日本人演者が講演し、それぞれの演題について米国の同じ分野の研究者がdiscussionするという形式でした。残念ながらその後の開催は今までは無かったのですが、このような経緯を踏まえて私が主催させて頂く第42回日本創傷治癒学会の会期中に第2回WHS/JSWH joint sessionを企画し、その講演者との打ち合わせのためも有り、この度Atlantaの学会に参加致しました。前回のmoderatorをお勤め頂いたDr. Laura Parnelに予めメールでお願いしてWHS側から推薦して頂いたお二人のWHS側からの演者(Dr. Lisa Goulds, Dr. Kenichi Tamama)に直接お会いしてDr. Laura Parnelを交えて打ち合わせをさせて頂きました(図6)。このようにして直接お会いしていろいろとお話しすることで第42回日本創傷治癒学会の会期中に第2回WHS/JSWH joint sessionを実現したいと願っていた私の夢の実現にさらに1歩近づけたように感じています。

【図6】第2回WHS/JSWH joint sessionの米国側moderator講演者との打ち合わせの模様。

日本人側の演者はご担当プログラム委員でmoderatorもご担当頂く予定の東邦大学医学部病理学講座 赤坂 喜清先生とご相談させて頂きながら選考を進めております。このセッションは全て英語だけのsessionとはなりますが、Wound Repair and Regeneration誌を共同のOfficial journalとして持つ、2学会の連携をさらに深め、若い日本の研究者の皆様にも良い刺激となるsessionとなりますようさらに準備を進めさせていただこうと思っています。この度は滞在期間が短かったのと、既にお話ししました打ち合わせのために時間を費やしましたため余り多くのprogramを聴講することは叶いませんでした。但し、以前から大変に注目しておりましたYoung investigators symposiumを聴講しましたのでその点につきまして報告させて頂きます。Young investigators symposiumは既に長くWHSでは実施しているsessionで以前の日本創傷治癒学会ニューズレターでもBaltimoreでのWHSの学会の際に私が感じましたことをご報告致しましたのでご記憶の会員の先生も多いかとは存じますが、いくつかの研究施設から若手研究者が最新の研究成果を発表してそれをBoard memberが採点して最終日に優秀研究者を表彰するというものです。

この度のsessionでも少し緊張しながらも力の入った若手研究者の講演に引き続き、大変に熱心に微に入り細に入り細かいdiscussionが会場の前方に席を取った指導的な立場にある先生達により進められていたのが大変に印象的でした。日本創傷治癒学会の学会賞選考委員会でも数年前からこのような試みが本学会でもできないかと言うことで

の議論から始まり、既に学会賞や、研究奨励賞が設けられてきました。この経緯を踏まえて昨年の理事会で学会賞選考委員会から理事会へ日本創傷治癒学会でも書類審査のみでなく、実際に講演いただいた上での評価で研究奨励賞受賞者を決定、会期中に表彰するという試みがよろしいのではとの提案がなされ、理事会、評議員会、総会で承認されました。この決定を踏まえ、私が主催させていただきます第42回日本創傷治癒学会で初めて研究奨励賞を抄録募集の際に同時に募集、前審査の後、5名ほどの選抜者に15分程度のご講演をしていただいた後に学会賞選考委員会の委員の先生達の採点で受賞者を決定して学会最終日の午後に結果を発表して表彰するという試みが初めて行われます。研究中の皆様におかれましては皆様の最新の研究成果を是非この機会にふるってご応募頂きますように心からお願い申し上げますとともに、指導的な立場にいらっしゃいます諸先生にも3日に予定されています、研究奨励賞講演セッションに是非ご参加頂きdiscussionに積極的にご参加頂く事に加え、翌4日に予定されています表彰式にもご参加頂きますように、この場をお借りしましてお願い申し上げます。

私自身このような試みが将来のさらに優れた研究成果を生む原動力となりますことを確信しておりますとともに、心から現実となりますことを祈っております。なお、Atlantaの学会では学会自体がSAWCとWHSとの合同であったこともあり、学会内の企業展示だけでも大変に見応えがある規模の大きなものでした。本邦ではまだ入手できない、新しい概念の治療器具、被覆材などが大きな会場いっぱいに展示されていました（図7）。残念ながら第42回日本創傷治癒学会の企業展示会場はスペースが限られておりますので余り広いスペースはご提供できませんが現状でも数多くの企業の皆様にご協賛戴ける見通しとなっておりますので、学術集会のみならず企業展示の場にも足を運んで頂きますことを期待しています。尚、企業展示会場は正面入り口を入ったすぐの1階ホールで開催予定です。また、新しい企画として各社のブースにスタンプを用意させていただき、企業全てをスタンプラリーの様な形で訪問した方には学会最終日に抽選でiPadを進呈する企画も予定しておりますので、企業展示につきましても多くの企業から貴重な情報を提供していただける機会となれば幸いです。

【図7】2012 SAWC/WHS meeting の企業展示。未だ本邦では未発売の治療器具、被覆材などが大きい会場で多彩に企業の参加の下、展示されていました。

また、最終日の4日の朝にはInnovation seminar（モーニングセミナー）として北海道大学名誉教授守内哲也先生に「ライフサイエンスビジネスにおける知的財産権について－大学発ベンチャーの成功例と失敗例－」との題目でどのようにして研究成果を事業化していくのかについての戦略をお話し頂く予定でおります。ご存じの方も多いかとは存じますが守内先生は北海道で最も成功したベンチャーカンパニーの取締役をお勤めですので本セミナーは研究成果を将来事業化することを念頭に置いて研究することの重要性を認識し、その具体的な戦略を知るためにまたとない機会となると思い、企画させて頂きました。大学の研究者、企業で研究開発に携わっていらっしゃる皆様にも是非ご参加頂きたいと願って企画させて致しましたのでふるってご参加下さい。このイノベーションセミナーではおいしいクロワッサン

とコーヒーの提供を予定させていただいていますことも申し添えます。

4日午後の学会期間中の最後には本学会ガイドライン作成ワーキング委員会主催のクリニカルコンセンサスセッションの開催も予定されています。台数は限られますがアンサーパッドも用意させて頂きより良い治療戦略の決定のための良い指標となりますようこのセッションへのご参加と臨床経験の豊富な会員の皆様のご意見を頂きますようにお願い申し上げます。

このように今までも本学会が実践して参りました創傷治癒に関わる研究、臨床の現場での数多くの進歩に関する成果の発表と議論を通じて会員相互の自由な意見交換の場を提供し、その病態の解明とより良い治療戦略の確立のためにこのたびはそれをさらに拡大して多くの関連学会の会員にもご参加頂きさらに発展的な研究を始める端緒の機会となることを第42回日本創傷治癒学会で目指しておりますので会員各位のご協力を心からお願い申し上げます。

最後に寒い時期の北海道での開催にはなりますが、北国の冬でしか体験できない楽しみもあると思っております。何よりも皆様のご協力で多くの演題をご応募頂いてお一人でも多い医師、看護師、基礎研究者、企業の皆様にご参加頂き、学術的にも実り多い学術集会となりますことを心から期待しております。重ねて会員の皆様、中でも若い医師、研究者、看護師の皆様のご参加をお願い申し上げますとともに、会員の皆様にはお知り合いの方々を多数お誘い頂き、共々ご参集頂きますように伏してお願い申し上げます。

WRRに会員の論文が掲載されました

会員の論文がWound Repair and RegenerationのVolume20 Issue No.2に掲載されました。論文名、著者は下記の通りです。

投稿規程に関しましてはジャーナルホームページ、http://www.wiley.com/bw/journal.asp?ref=1067-1927&site=1より入手してください。また各巻頭に掲載されておりますInformation for authorsをご参照下さい。なお、円滑な審査を行うために、2004年度よりオンライン投稿を推奨しております。

小川　令　先生（日本医科大学　形成外科）
百束　比古　先生（日本医科大学付属病院　形成外科・美容外科）

「The relationship between skin stretching/contraction and pathologic scarring: The important role of mechanical forces in keloid generation」
P.149 ～ 157

腹痛、腹部膨満感に

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

=100= ツムラ大建中湯（ダイ ケン チュウ トウ）

エキス顆粒（医療用）

薬価基準収載

●慢性便秘症患者、過敏性腸症候群便秘優位型などの腹痛、腹部膨満感に効果があります。[1)～4)]

●米国における無作為化二重盲検試験（健常人）にて、大腸輸送能の有意な促進効果が確認されました。[5)]

●次の3つの機序による腸管運動亢進作用を示します。

1）セロトニン3型、4型受容体を介するアセチルコリン遊離促進（*in vitro*、ラット、イヌ）[6)～8)]

2）消化管運動亢進ホルモンであるモチリンの分泌促進[9)]

3）腸管粘膜層におけるバニロイド受容体を介した作用（*in vitro*）[10) 11)]

●腸管（小腸、大腸）血流量を増加させます。（ラット）[12) 13)]

●副作用は、間質性肺炎、肝機能障害、黄疸などです。

効能又は効果

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

用法及び用量

通常、成人1日15.0gを2～3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

使用上の注意（全文記載）

1. 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）　肝機能障害のある患者［肝機能障害が悪化するおそれがある。］　2. 重要な基本的注意　(1)本剤の使用にあたっては、患者の証（体質・症状）を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。　(2)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重複に注意すること。　3. 副作用　本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していないため、発現頻度は不明である。　(1)重大な副作用　1)間質性肺炎：咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常等があらわれた場合には、本剤の投与を中止し、速やかに胸部X線、胸部CT等の検査を実施するとともに副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。2)肝機能障害、黄疸：AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

	頻度不明
過敏症[注1)]	発疹、蕁麻疹等
消化器	胃部不快感、悪心、嘔吐、腹痛、下痢等

注1）このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

4. 高齢者への投与　一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。　5. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与　妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。　6. 小児等への投与　小児等に対する安全性は確立していない。［使用経験が少ない］

＊その他の詳細につきましては製品添付文書をご覧下さい。

［文献］　1) Horiuchi, A. et al. Gastroenterol. Res.2010,3(4), p.151.　2) 尾髙健夫ほか. 消化器の臨床. 2000,3(3), p.338.　3) 尾髙健夫. 漢方医学.2008,32(3), p.207.
4) 日沖甚生. 和漢医薬学雑誌.1994,11(4), p.310.　5) Manabe, N. et al. Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2010,298, p.G970.
6) Shibata, C. et al. Surgery.1999,126(5), p.918.　7) Fukuda, H. et al. J Surg Res.2006.131(2), p.290.　8) Satoh, K. et al. Dig Dis Sci. 2001,46(2), p.250.
9) Nagano, T. et al. Bio Pharm Bull. 1999,22(10), p.1131.　10) 中村智徳. MEDICAL TRIBUNE. 2003,36(22), p.33.
11) Satoh, K. et al. Jpn J Pharmacol.2001,86(1), p.32.　12) Murata, P.et al. Life Sci.2002,70, p.2061.　13) Kono, T.et al. J Surg Res.2008,150, p.78.

株式会社ツムラ　http://www.tsumura.co.jp/

●資料請求・お問い合せは弊社MR、またはお客様相談窓口まで。Tel.0120-329-970　（2012年1月制作）

■使用上の注意等の改訂には十分ご留意下さい。　KO-1001 ㊕